

## 事業成果報告書

2017年7月28日提出

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)
沖縄:基地・軍隊を許さない行動する女たちの会 (代表者名:高里 鈴代)
2. 研究または活動のテーマ(課題名)
「軍事化とジェンダー平和・正義に関する国際会議」沖縄開催 (「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」)
3. 助成額
50万 円
4. 実施期間
2016年8月～ 2017年6月
5. 実施状況
<p>1) 海外参加者との国際女性ネットワーク企画会議 (Zoom 会議、全5回)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2016年10月9日 第9回沖縄開催に向けて</li> <li>2016年11月25日 第会議のプログラムと分科会に関して。</li> <li>2016年2月11日 各国・地域での広報などに関して。</li> <li>2017年4月21日 各国報告書の作成に関して。</li> <li>2017年6月10日 会議全日程の最終確認</li> </ol> <p>2) 沖縄での事務局会議 (全16回)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2017年2月4日 事務局体制確認</li> <li>2月24日 全体テーマ、プログラムについて</li> <li>3月17日 開催場所など</li> <li>3月28日 海外参加者の人数など</li> <li>4月5日 これまでの経緯</li> <li>4月13日 海外参加者との連絡体制</li> <li>4月22日 通訳体制、機器、費用等</li> <li>5月2日 分科会テーマ</li> <li>5月8日 分科会発表者</li> <li>5月18日 プログラム最終確認</li> <li>5月22日 呼び掛け文確定</li> <li>5月25日 プログラム変更</li> <li>5月30日 分科会役割分担</li> <li>6月1日 フィールドトリップについて最終確認</li> <li>6月6日 最終準備</li> <li>6月12日 各国報告まとめ</li> </ol> <p>3) 連絡会議</p> <p>2017年3月15日 韓国、米国、日本参加者による連絡会議 (ニューヨーク)</p>

## 6. 事業成果と自己評価

軍事主義を許さない国際女性ネットワーク（以下、国際女性ネットワーク）は1995年9月の在沖米兵による性暴力事件に対する沖縄の女性たちによる抗議行動と、それに連帯した、米軍駐留地域の女性たちによる国際ネットワークである。以来、計8地域（フィリピン、韓国、グアム、ハワイ、アメリカ合衆国、プエルト・リコ、日本、沖縄）の女性たちが交流を続け、軍駐留地域の経験を分かち合い、軍事主義に抵抗するネットワークを形成してきた。1997年の第1回開催から20周年を迎えた今回の第9回「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク会議」沖縄開催は、「高江・辺野古での新基地建設の暴力的な強行への強い危機感から、この状況を海外でもより広く知らせて運動を広げたい」という思いから、沖縄の基地・軍隊を許さない行動する女たちの会の決意によるものである（秋林こずえ「軍事化阻止へつながる一国際女性ネットワーク会議報告」琉球新報2017年7月12日）。今回は「軍事主義に抗し持続可能な未来を！」をテーマに掲げ、6月23日の沖縄戦慰霊の日を挟み6月22日から26日までの5日間、国内参加者52名、またその他前述の6地域から33名（フィリピン4名、韓国10名、グアム3名、ハワイ8名、アメリカ合衆国7名、プエルト・リコ1名）計85名の女性が参加した。

第9回国際女性ネットワーク会議開催における竹村和子基金の助成金獲得は、経済的援助というだけでなく広い意味を国際女性ネットワーク自体にもたらした。第8回会議をプエルト・リコで2012年に開催して以降、メンバーが集まる必要性は強く認識されていたものの、資金難は高い壁であった。しかし本助成金獲得によって開催の目途がつき、それによって各地域でそれぞれが会議開催のための具体的にアクションを起こすこととなった。訪沖や連帯行動のために費用確保を含めたサポートシステムが形成され、さらに地域間での相互サポートが強められた。これらは第9回会議開催の不可欠な要素である。例えば、米国本土で活動する「女性のための真の安全保障」のメンバーはフィリピンの女性たちの参加費を援助した。またハワイでは会議参加のために若い世代が「女性の声・女性が語る」というフェミニストの視点から軍事主義を検証する新たなグループを形成し、地域コミュニティで在沖縄米軍基地問題のフィルム上映会をするなどして参加費用を捻出し、8名の会議参加を成功させた。

第9回会議ではこれまでの活動実績を踏まえ、軍事化された社会の変革とジェンダー平和と正義をテーマとして様々な議論が行われた。ジェンダーの視点から軍事主義と軍事化、それに起因する問題群を検証し、国際連帯の構築や政策立案について協議した。5日間の会議は、国際女性ネットワークメンバーによる会議（全体会議、分科会）、沖縄での新基地建設現場へのフィールドトリップ、一般公開シンポジウムと分科会で構成され、以下の日程で行われた。分科会のテーマは、①軍隊と性暴力、②植民地支配からの脱却と経済的自立、③軍事化に抗する非暴力運動、④基地と環境、⑤安全保障の再定義、である。

6月22日：記者会見、オリエンテーション、開会式

6月23日：魂魄の塔国際反戦平和集会、映画「未来への証言」鑑賞、各国報告

6月24日：辺野古訪問、国際女性ネットワークメンバー分科会

6月25日：公開シンポジウム（各国報告、分科会、全体報告）

6月26日：閉会式、記者会見

会議については地元新聞2社（沖縄タイムス、琉球新報）を中心に、約20の記事で取り上げられた。代表者の高里鈴代は、「（軍事化の）日常を生き、課題に取り組んでいる女性たちのつながりを大事にし」「安保をジェンダーの視点で捉え直す、命の視点で見直す」ことがこの会議の全体的な特徴だとした（沖縄タイムス、2017年6月12日）。また公開シンポジウムには約200人が参加し、各国からの報告では、「男性中心、軍事中心の考えかたでは平和は実現できない」こと、また「不平等な地位協定の改定」などが訴えられた。各地域からは、軍備の増強が市民の自由を制限し、市民運動が抑圧される状況が報告された。特に近年の傾向として、軍事主義の暴力が女性、有色人種やマイノリティに向けられていることへの危機感が共有された。

限られた期間ではあったが、参加者は米軍を中心としたグローバルな軍事主義の強化に抵抗する国境を超えた連帯の必要性を再確認した。

さらに運営委員の宮城晴美が示したように「参加した国や地域が沖縄で作成している性犯罪年表に連動させてフォーマットを統一し、記録すること、被害者がアクセスできるウェブサイトの共有、また関係機関にはその実態を訴え解決に向けた取り組みを行うこと」などの提起もあり、活動の継続が具体的に確認された。